琉球大学学術リポジトリ

沖縄本島中部における軍用地接収移動集落の一考察

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-02-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 町田, 宗博, Machida, Munehiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15707

沖縄本島中部における軍用地接収移動集落の一考察

A Note on the Displaced Settlements due to Declaration of Taking by the U.S. Military Installations in the Central Part of Okinawa Island

町　田　宗　博

1. はじめに

戦後沖縄社会へもたらされた最大のインパクトが米軍事基地の存在であることは、沖縄に住む者の共通した認識である。網羅的に書かれた地誌の本は言うにおよばず、簡単な観光ガイドブックに至るまで、•冒頭には基地の存在が記されており、最近では基地そのものも観光の対象になっている。近年の地理学プロパーによる労作、日本地誌研究所（1975）[1]によると、沖縄の地理的性格の一つとして「26年間のアメリカ統治の影響」をあげ、そのおもなものとして、1. 軍事基地の構築と部落の消滅　2. 基地都市の発達　3. 基地依存の経済　4. 人口の増加　5. ブロック建築の普及　6. 革新政治勢力の興隆の6点をあげている。とりわけ、景観の変化よりその地域の内実へ迫るという観点からすると、1. と 2. は重要であると考える。しかしながら、地理学的研究の側面から、1．2．のような沖縄の軍事基地設定による地域の変容を扱ったものは、関心の高さにもかかわらず、かならずしも多いとは言えない。

戦前の集落との関連で、集落地理的視点に立った成果は、仲松弥秀（1958）[2]、浮田典良（1973）[3]、田里友哲（1975・1978）[4]がある。仲松は、「軍事基地と集落」の項で、読谷村、嘉手納村、北谷村の各集落の戦後の移動の概略を図によって示し、1956年における具志川村（現具志川市）平良川の職業別地図を作成した。浮田は、昭和36年と大正11年の1／5万地形図を用いて、嘉手納村、読谷村の軍用地化のため消失した集落の概要を示している。田里は、金武町以南の沖縄本島中・南部地域の大正10年と昭和47年の集落分

布図より同地域の変容を概観し、戦後の米軍駐留による地域の変容をとりあげた。その中で基地の設定に伴う集落の移動を占領接収による集落（15市町村52集落）の移動と、昭和29年以後の強制接収による集落（3市村6集落）の移動に大別している。さらに伝統的な都市である那覇市とその周辺地域、純農村地域より一転して都市域に変容した中部五都市とその周辺地域の二つの都市化パターンについて、基地プロセスとの関連で論述した。戦後の中部地区における市街地の形成については、町田宗一（1965）[5]、田里友哲（1971）[6]がある。町田は嘉手納村（現嘉手納町）を調査地としてとりあげ、1947～59年に至るまでの市街地の形成にふれるとともに、嘉手納村に本籍を有する者と、他市町村からの外来者との地区別の人口構成を明らかにしている。さらに外来者の本籍地別構成から、本部・宮古・糸満の出身者が多いことを指摘している。田里は、コザ市の都市形成における時期区分を沖縄の戦後史とも関連させながら、Ⅰ戦時占領期（1945.4～1945.8）、Ⅱ戦後占領期（1945.9～1950.12）、Ⅲ戦後復興期（1951.1～1971）[7]に大別し、戦後復興期を創設期（1951.1～1950.3）、確立期（1956.4～1964.7）、成長期（1964.8～1971）[8]に細分した。さらに、それぞれの時期に沿って、コザ市の都市機能が充実していく過程を、軍用地の開放推移、人口の推移、本籍人口、年次別建築数、出身地別の商工業事業所数、綿密なフィールドワークによる1965年の主要道路沿線および商店街の業種別店舗数、看板の文字別（和文字・英文字・英和混用）による店舗数等の資料から、コザ市の都市的機能が充実していく過程と「基地の町」コザの地域的性格を明らかにした。土地利用という観点では中山満（1968）[9]があり、戦後沖縄についての経済的側面からの考察をなし、基地周辺の土地利用の変貌として沖縄本島中・南部の大小の「基地の町」の分布、外人向貸住宅地域の形成および軍用道路と沿線の市街化、黙認耕作についても述べている。さらにこの中で軍用地の接収以前の地目別構成についてふれ、宅地を最も多く接収されたところが北谷村（78%）であることを指摘している。さらに近年、地域計画に携わる研

究者が中心となった地域創造研究所（1975）[10]、地域計画研究所（1975）[11]、沖縄地域科学研究所（1982）[12]も基地と関連した市街地形成についての有益な指摘をなしている。

本稿では、これら先学の成果をふまえ、沖縄本島中部の米軍嘉手納空軍基地とキャンプ瑞慶覧をかかえる沖縄市（主として旧コザ市域）、北谷町、嘉手納町における軍用地接収によって移動した集落（以下移動集落とよぶ）と現在の居住地（戦後の市街地）について、聴き取りその他で得た資料を用い若干の考察を試みる。

2. 地域の背景

行政の沿革　明治期以降の同地域の行政の沿革は、以下のようになっている。

a．沖縄市　　1974年4月、コザ市と美里村が合併成立。

コザ市[13]

1956年7月　コザ村が市となる。（北谷村桃原区と北中城村島袋の一部を編入）

1956年6月　越来村がコザ村へ改称。

1946年4月　戦前の越来村復活。

1945年9月　キャンプコザ地区が胡差市となる。

1945年4月～6月　米軍による難民収容地区（臨時集落）が設置される。

1945年4月以前　明治41年に越来間切が越来村となり沖縄戦にいたる。

b．北谷町と嘉手納町[14]

1980年4月　北谷村が町となる。

1976年1月　嘉手納村が町となる。

1956年7月　北谷村桃原二区がコザ市へ編入される。[15]

1948年12月　嘉手納地域が北谷村より分村し、嘉手納村が成立。

1946年10月　桃原地区へ村役所復帰。[16]

1946年4月　越来村嘉間良に北谷村の仮役所が設置される。

1945年4月以前　明治41年に北谷間切（現在の北谷町・嘉手納町域）が北谷村となり沖縄戦にいたる。

この中で、コザ市の誕生は、集落を軍事基地として接収された人々を核とした人口集積の結果であり、嘉手納村の誕生は、旧北谷村域が広大な軍事基地によって二極に分断されたことに起因している。このように戦後の行政領域の変遷も、軍事基地の存在と大きくかかわってきている。

古村[17]**と屋取集落**[18]田里（1980）は、士族人口比率より、具志川間切とならび北谷間切、越来間切が、沖縄における屋取集落の核心地域であり、屋取集落の分布する台地面が、開墾・開拓の前線的性格を持っていることを指摘している。さらに、北谷間切、越来間切の古村は、すべて屋取集落を包含しており、大正期から昭和初年にかけて、一箇ないし複数の単位で行政区として独立するのが相ついでいることを述べている。表1は、

表1　越来間切、北谷間切における平民・士族構成

村名 ＼ 年次		明治13年 戸数	明治36年 平民戸数	士族戸数	戸数計	平民人口	士族人口	計	士族人口比率
越来間切	越来村	280戸	141戸	118戸	259戸	588人	579人	1,167人	49.61%
	諸見里村	109	105	21	126	432	131	563	23.27
	安慶田村	56	22	64	86	118	370	488	75.82
	照屋村	47	28	29	57	145	174	319	54.55
	胡屋村	99	98	20	118	405	126	531	23.73
	山内村	158	102	88	190	499	496	995	49.85
	仲宗根村	24	18	3	21	60	17	77	22.08
	上地村	157	105	90	195	429	436	865	50.40
	宇久田村	86	45	36	81	212	202	420	48.10
	大工廻村	186	97	187	284	466	1,003	1,469	68.28
北谷間切	北谷村	289	202	162	364	1,052	887	1,939	45.75
	桑江村	162	91	103	194	541	504	1,045	48.23
	浜川村	131	19	124	143	82	825	907	90.96
	玉代勢村	88	66	41	107	308	216	524	41.22
	平安山村	182	22	196	218	92	1,160	1,252	92.65
	伊礼村	58	12	62	74	50	297	347	85.59
	屋良村	255	146	192	2) 338	868	739	1,607	45.99
	野国村	156	56	121	177	196	741	937	79.08
	野里村	340	318	52	370	1,468	382	1,850	20.65
	嘉手納村	108	119	31	150	553	172	725	23.72
	砂辺村	101	92	16	108	486	62	548	11.31
	傳道村	44	31	20	51	155	70	225	31.11

〔注〕 1) 沖縄県史20巻所載明治13年「沖縄県統計概表」
明治36年区間切島本籍人員族称別及棄児より。
2) 郡区間切島ノ戸数及建物では334戸。

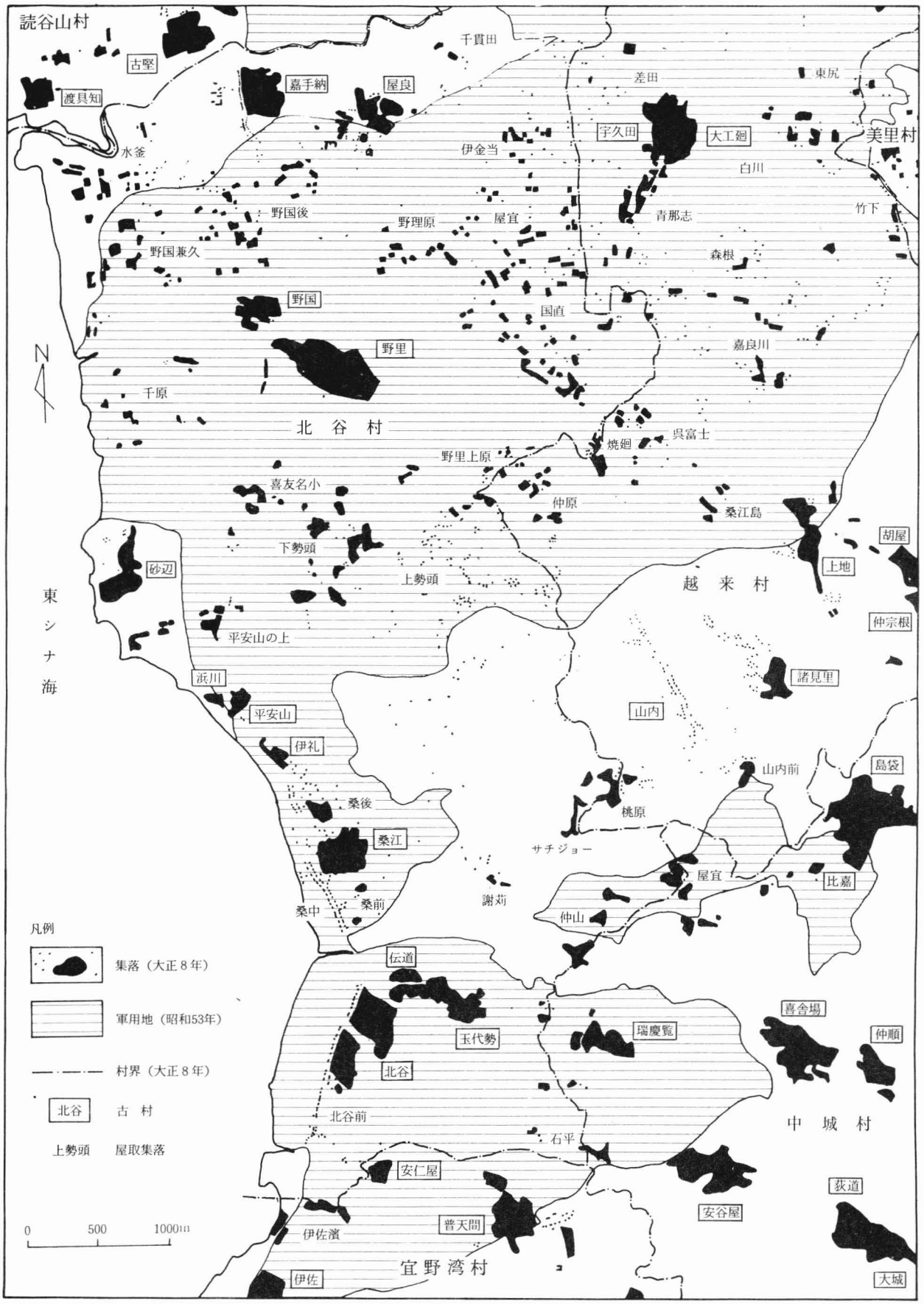

読谷山村
古堅
渡具知
嘉手納
屋良
千貫田
差田
東尻
宇久田
大工廻
美里村
水釜
伊金当
白川
野国後
野理原
屋宜
青那志
竹下
野国兼久
森根
野国
国直
野里
嘉良川
N
千原
北　谷　村
呉富士
焼廻
野里上原
喜友名小
仲原
桑江島
胡屋
下勢頭
上地
砂辺
上勢頭
越　来　村
東シナ海
平安山の上
仲宗根
浜川
諸見里
平安山
山内
伊礼
山内前
島袋
桑後
桃原
桑江
サチジョー
屋宜
比嘉
謝苅
桑中
桑前
仲山
凡例
集落（大正８年）
伝道
軍用地（昭和53年）
喜舎場
瑞慶覧
仲順
玉代勢
村界（大正８年）
北谷
北谷
古　村
北谷前
中　城　村
上勢頭
屋取集落
石平
安仁屋
荻道
安谷屋
0
500
1000m
普天間
伊佐濱
宜野湾村
伊佐
大城

図１　集落分布と軍用地

明治期におけるもので、記載の村はすべて古村である。それは、すべての屋取集落が、行政単位としては古村に含まれていることを示している。士族人口は、ほぼ屋取集落の構成員とみなしうるので、士族人口比率はそのまま同地域の集落構成における屋取集落の比率を示している。これによると、北谷間切では平安山村が最も高く、浜川、伊礼、野国がこれに次いでいる。最も低いのは砂辺村である。平民による構成が多く、戸数・人口ともに多いのは、野里、嘉手納村であり、平民・士族の構成がほぼ半々で、戸数・人口がともに多いのは、北谷・屋良村となっている。さらに、士族による構成が多く、戸数・人口ともに多いのは、平安山・浜川村となっている。越来間切における士族人口比率は、安慶田、大工廻、照屋村の順に高く、低い村は、仲宗根、諸見里、胡屋の順になっている。平民による構成が多く、戸数人口も多いのは、諸見里、胡屋村であり、平民・士族の構成がほぼ半々で、戸数・人口が多いのは、越来、山内村となっている。さらに、士族による構成が多く、戸数・人口が多いのは、大工廻村である。

図1は同地域の集落分布を示すものである。北谷間切における古村の分布は、北部と西の海岸沿い、南部に大別することができる。地形的には、北部は平垣面が多い。中部は、台地より続く傾斜面になっている。南部は、石灰岩台地末端よりつづく沖積低地となっており、沖縄でも知られた水田地帯となっていた。越来間切における古村の分布についてみると、北部と南部に大別できる。ほとんどの古村は南部に集中しており、北東から南西へかけて帯状に分布している。同間切は、海に面しておらず石灰岩の台地上に集落が展開している。同地域の屋取集落の分布は、古村と古村の間に分布し、古村より離れるにつれて、よく発達している。越来・北谷の間切界に沿って多くの屋取集落が展開する。

集落の展開　以上述べてきた古村と屋取集落の歴史的展開について、田里友哲[19]・仲松弥秀[20]の成果をもとに作成したのが図2である。第1段階は古代マキ村落の移動による古村の成立である。同地域においては仮設的な段階であるが、同域北部と南部における石灰岩提の存在、および沖積

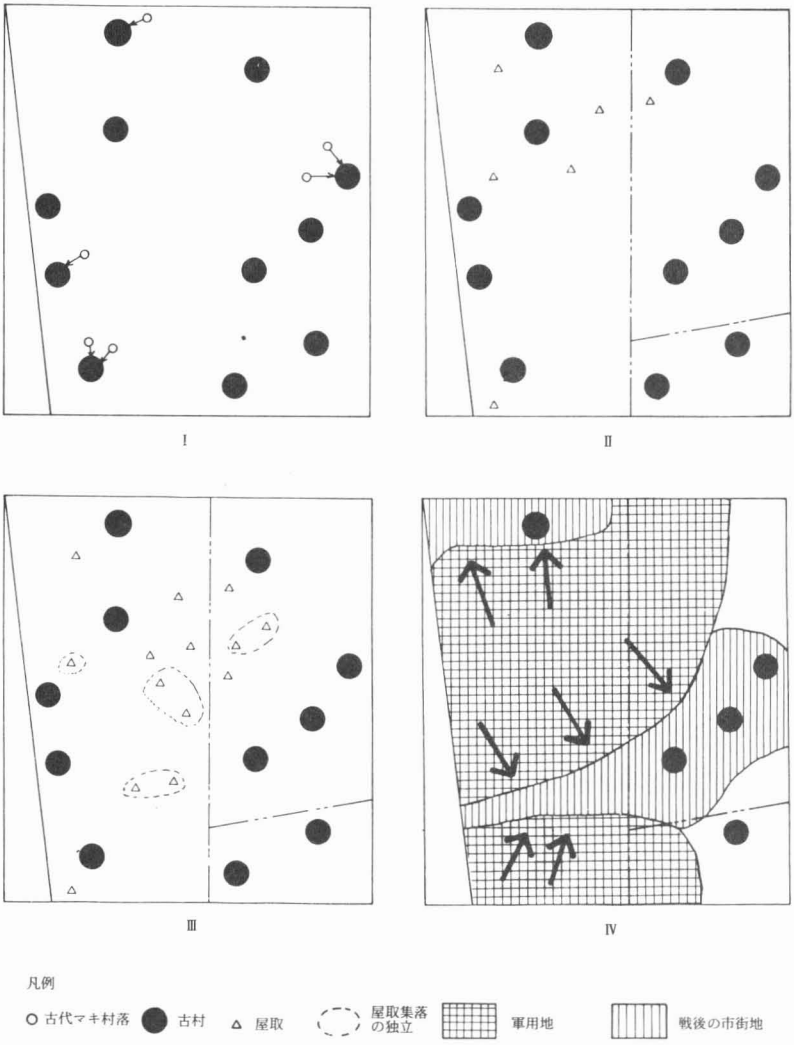


図 2　集落の展開

低地上の村落立地を考慮に入れた場合、充分に蓋然性のある段階であると考える。第Ⅱ段階は、首里・那覇を中心とした士族の入植段階であり、屋取集落の発生期である。この時期の入植は、古村近くの開墾が容易で土地条件の良好な地が選定されたと考えられる。北谷間切の屋取集落の中では、平安山の上屋取がこの段階の一つと考えられ、東部の山林地域を開墾して展開している上勢頭のある小組の最初の入植者は、この平安山の上屋取より分家してきたという。第Ⅲ段階は、屋取集落の拡大期である。大正時代には、一つの行政区として古村より独立する屋取集落が出現してきている。第Ⅳ段階が基地の接収による人口集積期、すなわち現在である。長い伝統と秩序の中で生活してきた人々にとっては、まったく突発的な土地の接収によって、戦前まで住みつづけてきた場所が消滅し、新たな市街地が形成された。

以下本稿では、移動集落成員の分布と現在の居住地、その組織や行事について概観する中で、若干の考察をおこなっていく。

3. 移動集落と現在の居住地

移動集落　前掲図1は、大正8年測図、同10年発行の1／2.5万地形図と、昭和54年発行の1／2.5万地形図より作成した。このため、昭和57年現在、軍用地域には一部返還された地域も含まれている。しかしながら、沖縄戦終結直後は、北谷村全域が米軍の占領地域となっており、住民の居住は許されていない。北谷村への居住許可は他町村よりも遅れ、昭和21年10月22日のことである。それも、ウフモー、桃原地区に限られていた。同年11月10日には嘉手納地区、昭和22年1月6日には謝苅地区が解放となる。[21] しかしいずれにしても、村全域に比べて住民が居住できるのは、ごく限定された空間でしかなかった。その後何度かの解放、再接収を経て今日にいたっている。[22] 移動集落の戦前における集落分布の態様は、図1に示すとおりである。その主な集落は以下のようになっている。[23]

a．越来村（現沖縄市）

古村

宇久田、大工廻、

屋取集落

御殿敷[※1]（ウチジナー屋取、御殿地屋取）、倉敷、白川、青那志、森根、嘉良川（東嘉良川屋取、カニンティー屋取、竹の花屋取）、仲原、西里、呉富士、唐田之上、

b．北谷村（現北谷町・嘉手納町）

古村

北谷、伊礼、平安山、玉代勢、浜川、桑江、野里、野国

屋取集落

上勢頭、下勢頭、上原、喜友名小、平上、桑江の前、桑江の中、桑江の後、国直、東（屋宜、野理原）、兼久、北前

※1　図1より北、現在の嘉手納弾薬基地内の集落

古村では、越来村で2集落、北谷村で8集落が移動している。屋取集落の場合、集落の分布形態は散在したものになっている。このことが、集落としての単位をおさえにくいものとしている。上記の屋取集落のなかには、複数の集落よりなる字（行政区）を単位とする集落もあれば、行政的には他の集団に属するが、ひとつのまとまった集団として、他の集落に認められている集落もある。戦後の沖縄においては、本来、土地とそこに居住する集団との不可分の表象であった「字」あるいは集落地名は、集落の消滅、すなわち土地とそこに居住してきた集団の分離によって、集団に対する呼称としての側面が強くなっている。さらに、沖縄島中、南部の各地に存在する次の事例も忘れてはならないであろう。本調査地域に隣接する北中城村の古村、比嘉の場合、戦後軍用地として集落が接収され、比嘉の人々は現在の沖縄市域へ移動した。現在その場所の地名は、比嘉として定着している。これらのことは、本稿で扱う移動という現象が、単に物質的な移動のみではなく、先祖以来の経験が累積してきた「場所」の移動でもあるということを示唆している。また、以下においては、移動集落の成員によっ

て構成された現在の集団を「旧字」と呼ぶことにする。それは、前述したように「字」が集団に対する呼称として用いられることが多くなってきたことと、ほとんどの移動した集落の人々が、その集団を「旧字」と呼ぶのが一般化しているからである。戦前の集落で生活してきた者にとってそれは、その集団をとおして、戦前の集落での生活や様々な経験をまざまざと思い描けるものである。

移動集落成員の分布　表２～４は、それぞれ旧越来村、旧北谷村出身の嘉手納空軍基地地主の居住地構成を示している。これは軍用地地主についての統計で、旧字成員のすべてについて同様の傾向があるとは断じがたいが、一つの指標になると考える。さらに同統計には、基地縁辺に立地し、集落域の接収はなされていない字もあるが、これは、基地内に耕地を所有していたことによる。しかし、これらの集落に関しても、沖縄戦終結直後は米軍の占領地域で、居住の許可はなされていない。その後の限定された居住地区の拡大につれて、他集落の人々も移り住んだため、戦前の集落とは内部構成も異なるものとなっている。

表２は、現嘉手納町域の旧字出身地主の居住地構成を示している。この中で、屋良、水釜、嘉手納の集落域は、大部分が軍用地としての接収は受けていない。集落域を接収された旧字地主のほとんどは、「嘉手納」を中心に居住している。全旧字出身地主の町内への残留は、77.8％となっている。町外では、国直（37.7％）、東（38.1％）の旧字地主が「沖縄市」に居住する。「北谷町」へ居住する者は、全体の1.1％にすぎない。

表３は、旧越来村域の旧字出身地主の居住地構成を示している。表中、現住所の10地区は、いずれも戦前に独立した字の地域である。「嘉間良、山里」が屋取集落の独立による他は、古村を核とした字である。同表によると、多くの旧字地主が、「胡屋、越来、上地」を中心に居住するのに対して、仲原（50.1％）、西里（37.3％）、呉富士（26.6％）が「諸見里」に居住する。12旧字の合計をみると、「胡屋」（27.0％）、「越来」（14.8％）、「上地」（14.0％）、「諸見里」（12.4％）の順となっている。さら

表2　嘉手納空軍基地地主の居住地別居住者構成（旧北谷村の嘉手納町域在住者）

出身字＼現住所	町内				町外居住者																合計
	屋良	水釜	嘉手納	町内計	沖縄市	北谷町	読谷村	石川市	具志川市	北中城村	中城村	宜野湾市	浦添市	国頭村	本部町	名護市	那覇市	南大東村	県外	町外計	
野里	14 (5.2)	10 (3.7)	214 (79.9)	238 (88.8)	16 (6.0)		4 (1.5)	4 (1.5)				2 (0.6)	1 (0.4)		1 (0.4)	1 (0.4)	1 (0.4)			30 (11.2)	268人 (100.0)%
国直	5 (2.8)	7 (4.0)	83 (47.4)	95 (54.2)	66 (37.7)	5 (2.8)	1 (0.6)	1 (0.6)				3 (1.7)	1 (0.6)				1 (0.6)	1 (0.6)	1 (0.6)	80 (45.8)	175人 (100.0)%
東	32 (17.6)	9 (5.0)	52 (28.7)	93 (51.3)	69 (38.1)		3 (1.7)	3 (1.7)	2 (1.1)		2 (1.1)	3 (1.7)	1 (0.5)			2 (1.1)	3 (1.7)			88 (48.7)	181人 (100.0)%
野国	2 (1.1)	33 (17.6)	133 (71.2)	168 (89.9)	12 (6.4)	2 (1.1)	1 (0.5)					1 (0.5)					3 (1.6)			19 (10.1)	187人 (100.0)%
兼久		49 (38.3)	68 (53.1)	117 (91.4)	4 (3.1)	2 (1.6)	1 (0.8)		1 (0.8)								3 (2.3)			11 (8.6)	128人 (100.0)%
屋良	100 (66.2)	3 (1.9)	27 (17.9)	140 (86.0)	9 (6.0)	3 (1.9)	2 (1.3)	1 (0.7)		1 (0.7)			1 (0.7)		1 (0.7)		1 (0.7)		2 (1.3)	21 (14.0)	151人 (100.0)%
水釜	1 (2.3)	25 (58.2)	16 (37.2)	42 (97.7)			1 (2.3)													1 (2.3)	43人 (100.0)%
嘉手納	3 (2.8)	1 (1.0)	76 (73.1)	80 (76.9)	14 (13.4)	1 (1.0)	1 (1.0)	1 (1.0)	1 (1.0)				1 (1.0)	1 (1.0)			4 (3.7)			24 (23.1)	104人 (100.0)%
合計 (全居住者構成比率)	157 (12.6)	137 (11.1)	669 (54.1)	963 (77.8)	190 (15.4)	13 (1.1)	14 (1.1)	10 (0.8)	4 (0.3)	1 (0.1)	2 (0.2)	9 (0.7)	5 (0.4)	1 (0.1)	2 (0.2)	3 (0.2)	16 (1.3)	1 (0.1)	3 (0.2)	274 (22.2)	1,237人 (100.0)%

［注］1）昭和52年嘉手納町・沖縄市・北谷村軍用地等地主会資料より。
2）（　）内数は筆者作成。

表3　嘉手納空軍基地地主の居住地別居住者構成（旧コザ市域在住者）

出身字＼現住所	旧コザ市域											市域外	
	胡屋	越来	仲宗根	上地	嘉間良	照屋	諸見里	山内	山里	安ゲ田	旧市域合計	その他	合計
御殿敷	16 (34.0)	12 (25.5)	4 (8.5)	2 (4.3)	4 (8.5)	1 (2.1)				2 (4.3)	41 (87.2)	6 (12.8)	47 人 (100.0) %
倉敷	6 (13.9)	10 (23.3)	5 (11.6)	5 (11.6)	2 (4.7)	5 (11.6)	2 (4.7)			2 (4.7)	37 (86.0)	6 (13.9)	43 人 (100.0) %
白川	10 (10.4)	35 (36.5)	1 (1.0)	11 (11.5)	15 (15.6)	1 (1.0)	5 (5.2)			7 (7.3)	85 (88.5)	11 (11.5)	96 人 (100.0) %
大工廻	28 (23.7)	23 (19.5)	2 (1.7)	13 (11.0)	6 (5.1)	3 (2.5)	10 (8.5)			19 (16.1)	104 (88.1)	14 (11.9)	118 (100.0) %
青那志	40 (40.9)	11 (11.2)	6 (6.1)	12 (12.2)	5 (5.1)	2 (2.0)	8 (8.2)			4 (4.1)	88 (89.8)	10 (10.2)	98 人 (100.0) %
宇久田	30 (30.6)	18 (18.4)		9 (9.2)	4 (4.1)	3 (3.1)	12 (12.2)			11 (11.2)	87 (88.8)	11 (11.2)	98 人 (100.0) %
森根	48 (34.3)	7 (5.0)	9 (6.4)	35 (25.0)	14 (10.0)		11 (7.9)	1 (0.6)		4 (2.9)	129 (92.1)	11 (7.9)	140 人 (100.0) %
嘉良川	16 (21.1)	21 (27.7)	3 (3.9)	8 (10.5)	9 (11.8)	2 (2.6)	1 (1.3)			6 (7.9)	66 (86.8)	10 (13.2)	76 人 (100.0) %
仲原	6 (8.8)		4 (5.9)	6 (8.8)			34 (50.1)	9 (13.2)	5 (7.4)	2 (2.9)	66 (97.1)	2 (2.9)	68 人 (100.0) %
西里	15 (29.4)	1 (2.0)	1 (2.0)	7 (13.7)	3 (5.8)	1 (2.0)	19 (37.3)				47 (92.2)	4 (7.8)	51 人 (100.0) %
呉富士	25 (36.8)	1 (1.5)	9 (13.2)	5 (7.4)	7 (10.2)	1 (1.5)	14 (20.6)				62 (91.2)	6 (8.8)	68 人 (100.0) %
唐田之上	13 (35.1)		1 (2.7)	19 (51.4)	1 (2.7)		1 (2.7)			1 (2.7)	36 (97.3)	1 (2.7)	37 人 (100.0) %
合計 (全居住者構成比率)	253 (27.0)	139 (14.8)	45 (4.8)	132 (14.0)	70 (7.4)	19 (2.0)	117 (12.4)	10 (1.1)	5 (0.5)	58 (6.2)	848 (90.2)	92 (9.8)	940 人 (100.0) %

［注］1）昭和52年嘉手納町・沖縄市・北谷村軍用地等地主会資料より。
2）（　）内数は筆者作成。

に、「山内」、「山里」への居住者が、仲原をのぞくとほとんどいないのが注目される。また、全旧字地主の90.2％までが、旧越来村域内に居住している。

表4は、現北谷町域の旧字出身地主の居住地構成を示している。同統計が、嘉手納空軍基地地主についてのものであるため、キャンプ瑞慶覧内に集落が立地した旧字は含まれていない。同表中、「上勢頭、桑江、浜川」への居住は、旧字の一部が返還されていることによる。「吉原」は、1956年に戦前の字謝苅と字桃原を合併し新設した字である。[24] 同町における戦後居住地の出発点となった、「ウフモー地区」（一部字桑江域）、「桃原地区」「謝苅地区」がこれに含まれる。同表より、村域全体としてみた場合、「吉原」（17.8％）、「砂辺」（12.2％）に居住する者が多い。「桑江」の場合、近年、山林開発による住宅地の整備が進み、同表よりさらに高い構成比となっていることが充分に考えられる。また、町内居住で、砂辺（66.5％）と他の旧字より高い値を示しているのは、その集落域の大部分が返還されていることによる。町内の全居住者比率（42.1％）は、旧越来村域、嘉手納町域と比べて最も低い値を示している。しかしながら、隣接する「沖縄市」の全居住者比率は、32.1％となり、「北谷町・沖縄市」の全居住者構成比率の合計は、74.2％となる。また、嘉手納町域地主の「北谷町」における居住者比率（1.1％）に比べて、北谷町域地主の「嘉手納町」における居住者比率（4.2％）は高くなっている。

表2～4を総括すると次のようになる。

1）嘉手納町域（77.8％）　旧越来村域の旧字地主の大半が出身町村内へ居住しているのに対して、北谷町域（42.1％）では半分にみたない。

2）「沖縄市」の全居住者構成比率は、嘉手納町域（15.4％）より北谷町域（32.1％）が高い。

3）北谷町域において、全居住者構成比率の「町内・沖縄市」の合計は74.2％となっている。

表4　嘉手納空軍基地地主の居住地別居住者構成（旧北谷村の北谷町域在住者）

出身字＼現住所	北谷町内						北谷町外																合計
	上勢頭	桑江	吉原	砂辺	浜川	町内計	沖縄市	嘉手納町	読谷村	石川市	具志川市	北中城村	中城村	宜野湾市	浦添市	国頭郡	那覇市	島尻郡	八重山	県外	国外	村外計	
上勢頭	8 (4.6)	23 (13.2)	31 (17.9)	1 (0.6)	2 (1.1)	65 (37.4)	67 (38.7)	3 (1.7)	2 (1.1)	1 (0.6)	1 (0.6)	2 (1.1)		3 (1.7)	2 (1.1)	3 (1.7)	8 (4.6)		11 (6.3)	2 (1.1)	4 (2.3)	109 (62.6)	174人 (100.0)%
上原	1 (2.3)		3 (7.0)			4 (9.3)	21 (48.8)	7 (16.3)			3 (7.0)	3 (7.0)		1 (2.3)	1 (2.3)		2 (4.7)			1 (2.3)		39 (90.7)	43人 (100.0)%
下勢頭	3 (1.8)	17 (10.1)	36 (21.3)	6 (3.5)	2 (1.2)	64 (37.9)	71 (42.0)	2 (1.2)	1 (0.6)	3 (1.3)	2 (1.2)	3 (1.8)	1 (0.6)	4 (2.3)	2 (1.2)	4 (2.3)	6 (3.5)		2 (1.2)	3 (1.8)	1 (0.6)	105 (62.1)	169人 (100.0)%
喜友名		12 (15.4)	14 (17.9)	1 (1.3)	3 (3.8)	31 (39.7)	29 (37.1)	2 (2.6)	1 (1.3)	3 (3.7)				4 (5.1)	2 (2.6)	2 (2.6)	4 (5.1)	1 (1.3)		1 (1.3)		47 (60.3)	78人 (100.0)%
平上		3 (3.7)	16 (19.5)	4 (4.9)	2 (2.4)	25 (30.5)	37 (45.1)	1 (1.2)			2 (2.4)			3 (3.7)		1 (1.2)	3 (3.7)	1 (1.2)		4 (4.9)	2 (2.4)	57 (69.5)	82人 (100.0)%
浜川		2 (2.9)	12 (17.6)	3 (4.4)	14 (20.7)	31 (45.6)	13 (19.2)	7 (10.3)	1 (1.5)		2 (2.9)	2 (2.9)		2 (2.9)		1 (1.5)	6 (8.8)	1 (1.5)		2 (2.9)		37 (54.4)	68人 (100.0)%
平安山		2 (3.4)	16 (27.1)	1 (1.7)	4 (6.8)	23 (39.0)	19 (32.2)	1 (1.7)	2 (3.4)					9 (15.2)		2 (3.4)	2 (3.4)				1 (1.7)	36 (61.0)	59人 (100.0)%
砂辺			21 (12.8)	86 (52.5)	2 (1.2)	109 (66.5)	11 (6.8)	12 (7.3)		9 (5.5)		2 (1.2)	1 (0.6)	6 (3.7)		2 (1.2)	4 (2.4)	3 (1.8)		3 (1.8)	2 (1.2)	55 (33.5)	164人 (100.0)%
合計 (全居住者構成比率)	13 (1.6)	59 (7.0)	149 (17.8)	102 (12.2)	29 (3.5)	352 (42.1)	268 (32.1)	35 (4.2)	7 (0.8)	17 (2.0)	10 (1.2)	12 (1.4)	2 (0.2)	32 (3.8)	7 (0.8)	15 (1.8)	35 (4.2)	6 (0.7)	13 (1.6)	16 (1.9)	10 (1.2)	485 (57.9)	837人 (100.0)%

［注］1）昭和52年嘉手納町・沖縄市・北谷村軍用地等地主会資料より。
2）（　）内数は筆者作成。
3）昭和52年当時、北谷村であるがここでは町とした。

4）越来村域においては、居住者比率の比較的高い地区（「胡屋、越来、上地、諸見里」）と、著しく低い地区（「山内、山里」）が存在する。

これまで、嘉手納空軍基地地主の居住地別居住者構成から、旧字成員の分布の傾向をみてきた。次に、キャンプ瑞慶覧基地域の旧字が欠落していた北谷町について、他の資料を用い考察を進める。表5は、北谷町域の旧字についての居住地別世帯構成を示している。作成は、各旧字の名簿と聴き取りにもとずくものである。このため、年度も一定のものではないが、現在の旧字成員のおよその傾向は示していると考える。さらに、表2～4が、嘉手納空軍基地というわく組みによる属地統計であるのに対して、表5は旧字ごとの属人統計であるが、必ずしもすべての旧字成員を含んでいるとは言いがたい面もある。しかしかえってこのことが、それぞれの旧字がよって立つ基盤の地区、旧字の活動の中心となる地区を明確にしている。このことを前提として表5をみると、北谷町を中心に居住し、その活動の拠点とする旧字は、北谷、玉代勢（72.2％）、伝道（90.3％）、桑江（76.0％）、伊礼（68.9％）、平安山（55.6％）である。旧コザ市域の居住者構成比率の高い浜川、平上、上勢頭、下勢頭について、さらに詳細に示したのが表6である。同表より「山内・山里・諸見里」に世帯の集中がみられる。このなかで、「山内・山里」は、北谷町と市界を接し、北谷町と道ひとつ隔てて近所づきあいをする地区もある。いわば、北谷町より、あふれ出た旧字住民が、「山内・山里」の市域縁辺には多数居住している。また「諸見里」もこれに隣接しており、同地区への転出の理由は、ほとんどの人が商業活動を行うためとのことであった。また、「山内・山里」地区は、前掲表3の中原をのぞく旧コザ市域出身地主がほとんど居住しない地区でもある。これまで述べてきたことにより、浜川、平上、上勢頭、下勢頭は北谷町と沖縄市の縁辺部をその活動の中心とする旧字であるということができよう。

戦後の市街地　これまで述べてきた旧字成員の居住する地域を図示した

表5　旧字世帯の居住地別世帯構成（北谷町域旧字）

現住所 / 出身字	北谷町	沖縄市 旧コザ市	沖縄市 旧美里村	嘉手納町	読谷村	石川市	具志川市	北中城村	中城村	宜野湾市	西原町	浦添市	宜野座村	金武町	那覇市	豊見城村	糸満市	南風原町	与那原町	佐敷町	県外	外国（ブラジル）	不明	合計
北谷 1)	270																							270世帯
玉代勢 2)	52 (72.2)	8 (11.1)					3 (4.2)			4 (5.5)		1 (1.4)			2 (2.8)						2 (2.8)			72世帯 (100.0)%
伝道 3)	37 (90.3)	3 (7.3)					1 (2.4)																	41世帯 (100.0)%
桑江 4)	76 (76.0)	12 (12.0)		2 (2.0)						1 (1.0)		2 (2.0)			1 (1.0)								6 (6.0)	100世帯 (100.0)%
伊札 5)	62 (68.9)	12 (13.3)	12 (13.3)							3 (3.4)													1 (1.1)	90世帯 (100.0)%
平安山 6)	30 (55.6)	22 (40.6)		1 (1.9)						1 (1.9)														54世帯 (100.0)%
浜川 7)	13 (33.3)	19 (48.7)			1 (2.6)		1 (2.6)			4 (10.2)					1 (2.6)									39世帯 (100.0)%
平上 8)	27 (22.9)	74 (62.7)	1 (0.8)	2 (1.7)	1 (0.8)		4 (3.5)	2 (1.7)		2 (1.7)					3 (2.6)		1 (0.8)	1 (0.8)						118世帯 (100.0)%
上勢頭 9)	194 (44.4)	197 (45.1)	5 (1.1)	4 (0.9)		4 (0.9)	5 (1.1)	4 (0.9)		8 (1.9)	2 (0.5)	1 (0.2)	1 (0.2)	2 (0.5)	8 (1.9)	1 (0.2)			1 (0.2)					437世帯 (100.0)%
下勢頭 10)	95 (37.8)	129 (51.4)	2 (0.8)	4 (1.6)		7 (2.8)	1 (0.4)	2 (0.8)	1 (0.4)	1 (0.4)		1 (0.4)			5 (2.0)					1 (0.4)		2 (0.8)		251世帯 (100.0)%

［注］ 1) 北　谷：昭和55年聴き取りによる。他市町村については不明。
2) 玉代勢：昭和52年作成「北谷村旧字玉代勢世帯カード」より作成。
3) 伝　道：昭和55年聴き取りにより作成。
4) 桑　江：昭和47年前後作成（？）「字桑江世帯名簿」より作成。
5) 伊　札：昭和54年作成（？）「旧字会員名簿」より作成。
6) 平安山：昭和55年「名簿」と聴き取りにより作成。
7) 浜　川：「昭和55年旧浜川部落家族表」より作成。
8) 平上（平安山の上）：昭和55年世帯名簿より作成。
9) 上勢頭：昭和55年世帯名簿より作成。
10) 下勢頭：昭和48年作成世帯名簿による。

表6　旧コザ市域における居住地別世帯構成（浜川、平上、上勢頭、下勢頭）

出身字＼現住所	胡屋	越来	仲宗根	上地	嘉間良	照屋	諸見里	山内	山里	安ゲ田	不明	旧コザ市域合計
浜川		1 (2.6)			3 (7.7)	3 (7.7)		7 (17.9)	4 (10.3)			18世帯 (46.2)%
平上	6 (5.1)	1 (0.8)		6 (5.1)		7 (5.9)	15 (12.7)	18 (15.3)	19 (16.1)	2 (1.7)		74世帯 (62.7)%
上勢頭	15 (3.4)	3 (0.7)	3 (0.7)	6 (1.4)	4 (0.9)	8 (1.8)	35 (8.0)	70 (10.1)	39 (8.9)	6 (1.4)	8 (1.8)	197世帯 (45.1)%
下勢頭	9 (3.6)		3 (1.2)	4 (1.6)	2 (0.8)	3 (1.2)	36 (14.3)	36 (14.3)	32 (12.8)	4 (1.6)		129世帯 (51.4)%

［注］1）作成資料は、それぞれ表5［注］による。

のが、図3～5である。同図の戦前の集落分布は、大正10年発行の1／2.5万図より作成。住宅地、墓地は、国土地理院、昭和55年発行の土地利用図を参考に、昭和54年発行の1／2.5万地形図より作成したものである。

図3は、嘉手納町におけるもので、同町の住宅域は図に示す地域がすべてである。屋良、嘉手納、水釜の戦前の集落を中心に、多くの家屋が密集している。町田（1965）[25]は、外来者が、特に字嘉手納に多く、「外来者の多いところは商店街も多く、外来者の分布と商店の分布とが一致」することを指摘している。また同町では、住宅地の確保のため、公有水面の埋立てを行っている。このことは、北谷町についても同様である。

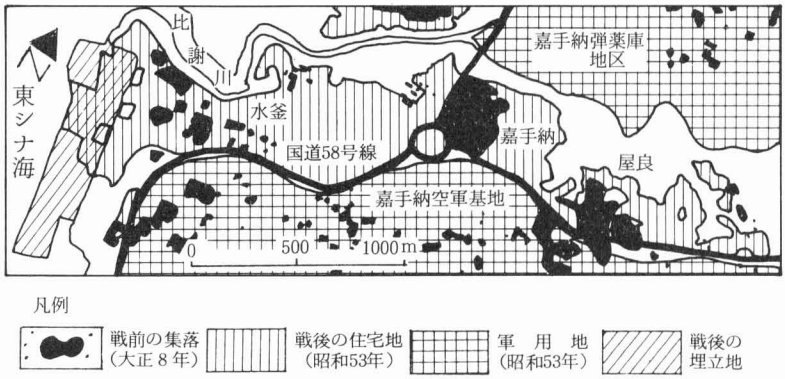


図3　戦前の集落分布と戦後の市街地（嘉手納町）

図4は、沖縄市における戦前の集落分布と戦後の市街地を示している。戦前の越来、安慶田、胡屋、仲宗根、上地、諸見里の各集落を核として、市街地が展開している。とりわけ、胡屋、上地が市街地の中でも中心地となっている。田里（1971）[26]は、同地域が「戦後0年で人口構成が寄り合い性格をつよく」し、「全沖縄から、基地労働者、軍作業員、軍人・軍属相手の基地業者が寄り合い、業者が呼び合っていつの間にか中部地区最大の人口を擁する」地域となったことを指摘している。さらにこれら各地からの「寄り合い人口はある意味でのフロンティアの性格をもち、基地との関連から生ずる新規の商業機能を興し」て市街地が形成されてきたこと

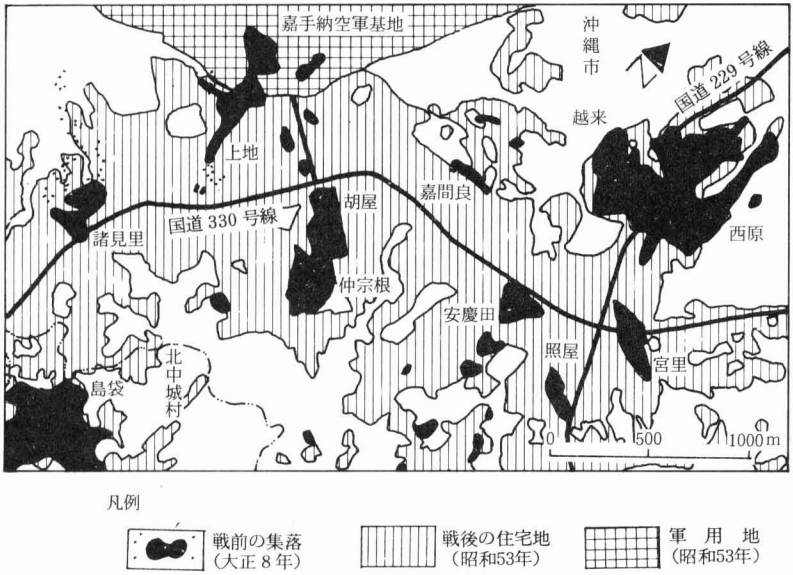


図4　戦前の集落分布と戦後の居住地（沖縄市）

を述べ、「基地の町」コザの地域的性格を明確にしている。このように、同地域は、各地から来た人々によって構成されているが、戦後の人口集積の核となったのは、集落を基地として接収された旧字の人々である。

図5は、北谷町と沖縄市縁辺における戦前の集落分布と戦後の市街地を

示している。同地域は、戦前の字上勢頭の一部と字桃原、字謝苅の屋取集落が立地してきたところである。昭和55年の町制移行にともない、行政区が変改され、図５の地域は、上勢区、桃原区、栄口区、桑江区、謝苅区、北玉区、字地原区の７行政区よりなっている。[27] しかし、慣用的には、謝苅地区、桃原地区、ウフモー地区、団地地区の４地区に大別することができる。行政区がかわる以前は、謝苅地区が謝苅１区～４区まで、桃原地区は、桃原１区と３区にわかれていた。団地地区は、謝苅区に含まれ、ウフモー地区は桃原３区となっていた。ここで桃原２区が欠落している理由は、「北谷村誌」によると次のとおりである。戦後の居住許可地区が、越来村

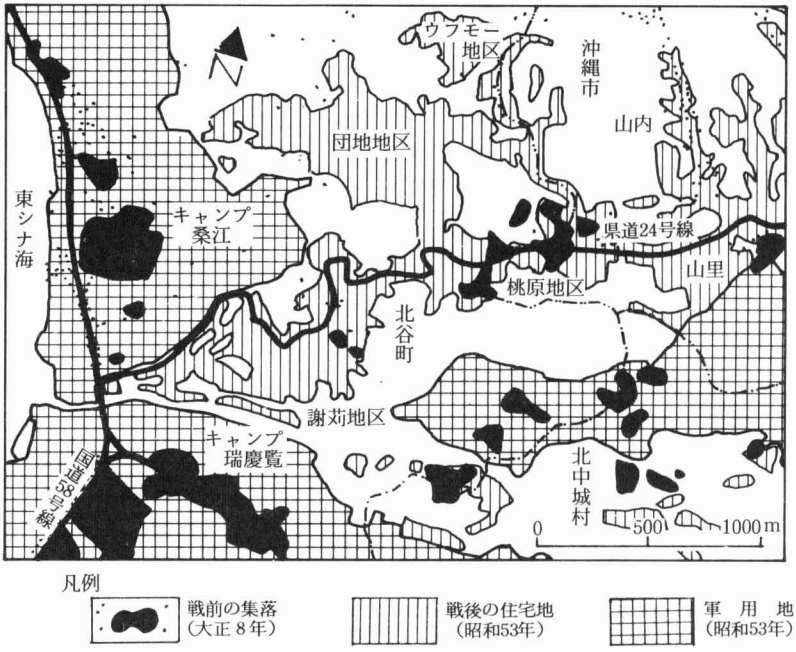
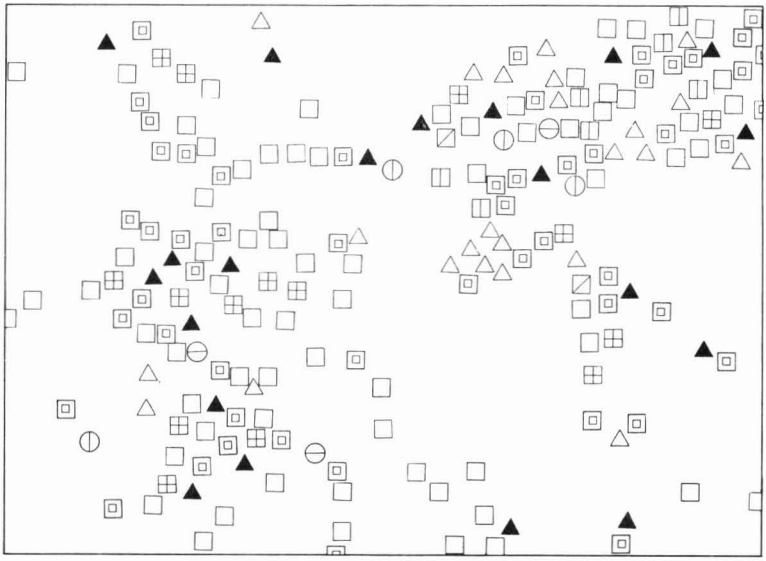


図５　戦前の集落分布と戦後の市街地（北谷町・沖縄市縁辺）

との隣接部であったため、北谷村域よりあふれ出し越来村へ居住する北谷村民が少なくなかった。このため、越来村域に住む北谷村民として一行政区（桃原２区）を形成した。村当局は同地区を北谷村に編入すべく努力を

重ねたが不調に終わり、1956年[28]コザ市の市域として確定し現在にいたっている。　現在、北谷町教育委員会が運営する北谷小学校も、沖縄市域となっている。本稿では、戦後居住地の発達過程を考慮に入れ、また慣用的な呼称となっていることもあり、旧桃原1区と旧桃原2区を桃原地区、旧桃原3区をウフモー地区、近年の山林開発による住宅地区を団地地区、団地地区をのぞく旧謝苅区を謝苅地区と呼ぶ。

これらの地区の内部を、さらに詳細に示したのが図6・図7である。図6は、ウフモー地区における出身集落別の世帯構成を示している。同地区



凡例

古村出身者		屋取集落出身者		
○ 北谷	◑ 伝道	▨ 砂前	▥ 平安山の上	◧ 謝苅
⊕ 伊礼	◐ 玉代勢	▧ 北前	⊟ 玉上	◨ 桃原
⊖ 浜川	◎ 桑江	□ 上勢頭	⊞ 喜友名小	▲ 外来者
⦶ 平安山		▣ 下勢頭	⊠ 桑前・桑中・桑後	△ 不明

（昭和55年聴き取りにより作成）

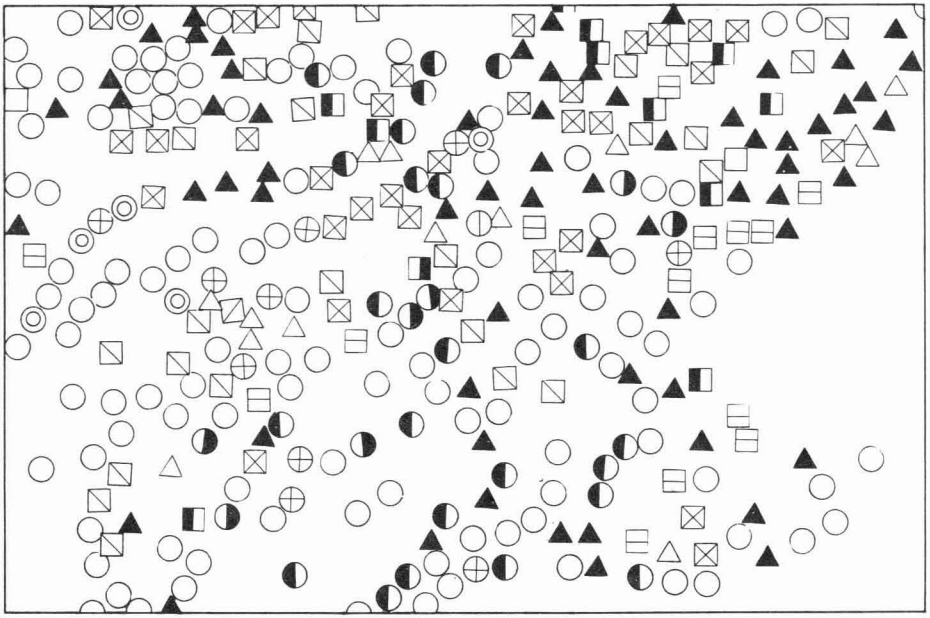
図6　ウフモー地区における出身集落別世帯構成

には、上勢頭、下勢頭、喜友名小を中心に、平安山の上（平上）、平安山、浜川、砂前（砂辺の前）の各集落出身者と、町域外出身の外来者が混在する。古村の出身者が少なく、ほとんどを屋取集落の出身者が占めているのが、この地区の特徴といえる。

図７は、謝苅地区における出身集落別の世帯構成を示したものである。図は、同地区のすべてを示したものではないが、全体の傾向をおよそ反映している。北谷、伝道、玉代勢のいわゆる「北谷三箇」と呼ばれる集落をはじめ、桑江、伊礼、桑前、桑中、桑後、玉上、北前、の集落出身者が混在する。屋取集落の出身者は少ないとはいえないが、それ以上に古村の出身者が多い。図中、桑江の出身者が少ないが、これは図域外に比較的まとまって居住する場所があるからである。さらにウフモー地区と比べて、外来者が多く居住している。また、ウフモー地区でみられた旧字出身者は、同地区にはほとんど居住していない。謝苅地区では、古村、屋取集落、外来者の混在がその特徴といえる。

一方、団地地区は、近年の宅地開発によるものであり、北谷町外の出身者も多く居住している。同地区へは、狭隘なウフモー、謝苅地区や、沖縄市その他の市町村に住んでいた北谷町出身者の移転も多い。

ウフモー地区、桃原地区には、現在の北谷町域北の集落出身者（平安山、浜川、平安山の上（平上）、砂前、上勢頭、下勢頭、喜友名小）を中心に世帯が構成され、謝苅地区では、町域南の集落出身者（伊礼、桑江、桑前、桑中、桑後、北谷、玉代勢、伝道、玉上、北前）を中心に世帯が構成されている。むろん、戦前より同地区に耕地を所有する者もいたが、そのことのみが以上のような世帯構成となった要因ではない。聴き取りにおいて、このような構成になった原因を質問したとき、常に返ってくる答えは、戦後の帰還にさいして、「戦前、自分の住んでいた土地に近いところに住んだから」ということであった。このようなことも含めて、旧字と現在の居住地についてのさらに詳細な検討は、稿をあらためて行いたい。



凡例

古村出身者		屋取集落出身者		
北谷	伝道	砂前	平安山の上	謝苅
伊礼	玉代勢	北前	玉上	桃原
浜川	桑江	上勢頭	喜友名小	外来者
平安山		下勢頭	桑前・桑中・桑後	不明

（昭和55年聴き取りにより作成）

図7　謝苅地区における出身集落別世帯構成

4. 旧字の組織と行事（北谷町域の旧字を事例として）

本稿では、北谷町域の旧字を事例として、聴き取りによって得た旧字の組織と行事の一端について、簡単に述べるにとどめる。

旧字の組織　ほとんどの旧字では、その成員を把握するため、名簿を作成している。当初、世帯主名のみによって作成されていた名簿も、昭和48年ごろより、家族名を含む名簿が作成されはじめ、すでにいくつかの旧字では、その整備を終えている。なかには、住民基本台帳なみ、あるいはそれ以上の完備されたものもあり、各世帯の家族構成、生年月日、さらには、各世帯の家の位置を地図によって示している旧字もある。これらの名簿が、一般官庁の名簿と異なる点は、ほとんどの旧字において、それぞれの世帯ごとにその屋号を記載していることである。これらの名簿は、主として敬老者の名簿を作成したり、旧字行事の通知等に用いられている。

「旧字」という呼称は、一般的な呼び方であるが、公的な名称として次のように決定した旧字もある。たとえば上勢頭の場合、会則によると、「北谷村旧字上勢頭親睦会」となっている。さらに下勢頭の場合、昭和52年より会の正式名称を「下勢頭郷友会」と決定した。

旧字の組織の要は、１人～３人ほどの世話役と各地域の連絡員である。さらに、これら世話役に助言をあたえる複数の年配者がいる。旧字でこれを顧問として決定しているところもある。旧字北谷の場合、旧字の世話役は、支部長（１名）、副支部長（２名）がおり、支部長は様々な行事運営の中心となる。副支部長は、各々会計、書記の仕事を担当している。この他の役職として、会計監査役等がおり、また学識経験者や、支部長経験者によって構成された顧問がいる。さらに、壮年代表、中年代表、婦人代表、青年代表よりなる35名の評議員がいる。

旧字北谷の場合、謝苅地区を団地組、１区組、３区組、４区北組、４区中組、４区南組の合計10組に分割し、それぞれに組長をおいている。旧字に関する諸伝達は、この組長を通して、旧字全世帯に連絡される。特に葬式の場合は、支部長は亡くなった人の屋号、名前、干支、出棺時刻、告別

式の時刻を記入した用紙を直接各組長あてに届ける。各組長は全世帯にこれを伝達する。葬式の手配、告別式の一切の仕事は、旧字の人の手によって行なわれる。葬式にさいして、ほとんどの旧字が、旧字単位で世話をするのに対して、上勢頭のみは、戦前より旧字内の各小組によって行なわれている。

宅地域の拡大につれて、旧字内の連絡単位である組も増加してきた。旧字伊礼の場合、1964年には、謝苅1区～4区までの4つの行政区に合わせて4組にわけていたが、1966年には謝苅1区をAとBに分け5組となった。さらに1968年には、村外居住者を1つの組として6組。1973年、団地があらたに組として加わり7組となっている。1978年には、団地が、A、Bの組にわかれて8組。1979年、あらたに砂辺を一組として、1980年現在9つの連絡区にわかれている。

旧字の組織への参加資格は、上勢頭の場合、その会則では「上勢頭小組に籍を有する者並びにその子孫」となっており、原則としては他の旧字でも同様である。ただし、ある条件のもとに村外出身者でもその組織への加入を認める場合がある。たとえば、ある旧字では、夫が村外出身者で、妻が旧字の出身であり、かつ現在北谷町に在住の人の加入を何人か認めている。

旧字行事　各旧字に共通して行なわれている行事にニングァチャーがある。これは、戦前の旧歴2月2日に行なわれたもので、別名クシュックィーと称する。現在各旧字で行なわれているニングァチャーは敬老会や総会、あるいは子供たちの勉学を励ます学事奨励会等を兼ねている。ニングァチャーは、そのほとんどが旧字単位で行なっているが、上勢頭では小組単位で行なわれ、下勢頭では年令集団別に行なわれている。

ニングァチャーの事例として、下勢頭をとり上げる。下勢頭のニングァチャーは、青年組、壮年組、老年組、婦人部にわかれて行なわれる。それぞれの組が、あらかじめその年に、ニングァチャーを行う家を決めておき、当日は朝からその家へ集まり一緒になって御馳走づくりを始める。この時

の料理人は、新しくその組に加入した新参者が行なうのが原則である。また料理の品目で、必ずニングァチャージューシーを加えなければいけない。お昼を過ぎ各組の料理が出来あがった頃、各組の代表者4～5名がそれぞれの組の料理を持参し、ウフモー地区にある下勢頭の拝所へ集まる。4つの組がそろうと全員で今日はニングァチャーである旨の報告をなし、料理を供え、三味線をかなで「かぎやで風」の音曲にあわせて、代表が舞いを舞った後、再び別れて各組のヤードゥ（宿、ニングァチャーを行う家）に帰る。それぞれの組では、宴会が始まり、新たにその組へ加入した新参者の紹介が行なわれる。さらに次年度のニングァチャーにもう一段上の年令集団に加入することになる者は、酒と料理を持って、次年度より加入することになる組へ挨拶に行く。そこで「次年度からは、この組に加入します。」という旨の挨拶をしながら、その組の全員に酌をしていく。これをもってその組の全員に顔が知れ、その人は次年度よりこの組のニングァチャーに加わるようになる。下勢頭の各組成員の年令は、青年組（ニーシェーター）が中学を卒業した社会人あるいは大学生から34歳までで、壮年組（ヤクミー）が35歳より49歳まで、老年組（タンメーター）が50歳以上となっている。ちなみにこの祭りは、戦前は男性のみの祭りであったが、昭和54年から、下勢頭郷友会に婦人部が結成され、ニングァチャーにも婦人が参加するようになった。他の屋取集落でも、戦前は男性のみ三つの組にわかれてこの行事を行なっていたが、現在でも戦前の形式でニングァチャーを行なっているのは下勢頭のみである。

先でふれた下勢頭の拝所は、基地の中にあったものであるが、それをウフモー地区に移したものである。この拝所には、集落の四隅を守るユシミヌ神とミジヌ神（水の神）とが祭ってある。旧歴12月24日には各家庭での四隅の拝みを終えた後、下勢頭の拝所で字全体の四隅の神に対して拝む、フトゥチヌウガンがある。

沖縄本島中部では旧盆のエイサーが盛んである。北谷町域での戦後の初期のエイサーは、旧字単位で始められた。この頃、旧字単位でエイサーを

行っていた旧字は、北谷・桑江・桑前・桑中・北前・謝苅・桃原・上勢頭であったという。この旧字単位のエイサーは、1954年～1957年頃まで存続していた。ところがエイサーを担う青年達の年代がかわり、エイサーも行政区単位で行なわれるようになってきた。しかし、エイサーはそれぞれの字によって違いがあり、行政区を単位としたエイサーも旧字の影響を受けていた。これはその当初にエイサーを指導した人達の出身字にもよるが、たとえば、謝苅一区のエイサーは旧字桑江と桑前のエイサーの型が残っているとか、謝苅二区のエイサーには、旧字謝苅と北前のエイサーの型が残っているとかである。このように旧字としてのエイサーは消えたが、それは行政区単位でのエイサーとして受け継がれている。旧字から行政区単位へというエイサーの担い手の変化は、同一の地域で生活し、同一の中学校（北谷中学校－昭和56年まで北谷町の中学校は同校のみ）で学んできた生徒たちが、エイサーを担う若者として成長してきたからであろう。

5. まとめ

(1) 軍用地の接収による移動集落は、旧越来村域（現沖縄市域）においては、古村で2集落、屋取集落が10集落である。旧北谷村域（現北谷町・嘉手納町）においては、古村が8集落、屋取集落は12集落である。

(2) 嘉手納空軍基地地主のそれぞれの出身地への居住比率は、嘉手納町域、旧越来村域出身者が高いのに比べ、北谷町域出身者では半分にみたない。

(3) 嘉手納空軍基地地主の沖縄市への全居住者構成比率は、嘉手納町域より北谷町域が高い。

(4) 旧越来村域の旧字成員は、胡屋、越来、上地、諸見里に多く居住し、山内、山里への居住は著しく低くなっている。

(5) これに対して、北谷町域の旧字成員は、山内、山里、諸見里に多く居住する。

(6) 北谷町内を活動の拠点とする旧字は、北谷、玉代勢、伝道、桑江、伊礼、平安山である。

(7) これに対し、北谷町と沖縄市縁辺地域を活動の拠点とする旧字は、浜川、平上、上勢頭、下勢頭である。

(8) 北谷町ウフモー地区には、旧北谷村域北の集落の出身者が混在し、古村の出身者が少なく、屋取集落出身者が多い。

(9) これに対し、謝苅地区は、旧北谷村域南の集落出身者が居住し、多くの古村出身者と、屋取集落出身者、外来者が混在している。

(10) 旧字の組織と行事について、その事例の一端を示した。

〔謝辞〕

本稿を作成するにあたり、日頃よりご指導ご鞭撻をいただいております田里友哲教授はじめ琉球大学法文学部地理学教室の諸先生方ならびに前田昇教授はじめ大阪教育大学地理学教室の諸先生方に深く感謝の意を表するとともに、調査にさいして多大のご協力をいただきました地域の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

〔注及び参考文献〕

1）日本地誌研究所・青野壽郎・尾留川正平編（1975）「日本地誌21－大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県－」二宮書店、540～542頁。

2）仲松弥秀（1958）沖縄「集落地理学講座」3朝倉書店、414～426頁。

3）浮田典良（1973）沖縄の基地の町　藤岡謙二郎編「地形図に歴史を読む」第5集　大明堂、144～145頁。

4）田里友哲（1975）集落からみた沖縄本島中・南部地域の変容　歴史と地理、（241）　9～14頁。

————（1978）地形図上にみられる米軍駐留による沖縄地域の変容　地図、16（3）　14～15頁。

5）町田宗一（1965）嘉手納村における戦後の地域形成について　琉大地理、（4）　19～34頁。

6）田里友哲（1971）コザ市の都市形成についての一考察　「沖縄文化研究」（琉球大学沖縄文化研究所）　（1）　1～47頁。

7）原著では現在となっている。

8）前掲7）

9）中山満（1968）沖縄の基地と土地利用の変貌　地理、13（5）　18～24頁。

10）地域創造研究所（1975）「軍用地転用基本計画に関する調査報告書」。現在同研究所は沖縄地域科学研究所に改称。

11）地域計画研究所（1975）「北谷村土地利用基本計画」

12）沖縄地域科学研究所（1982）「島嶼都市の構造と展開－沖縄県を事例として－」。

13）前掲6）4～5頁。沖縄市（1975）「沖縄市要覧」資料編9頁。なお、本稿での調査地域が、主としてこのコザ市域を対象としているので、美里村についてはふれない。

14）沖縄県市長会、町村会共編（1981）「沖縄県市町村要覧」200頁。

15）前掲13）「沖縄市要覧」9頁。

16）真栄城兼良編（1961）「北谷村誌」北谷村役所、174～175頁。

17）田里友哲（1980）沖縄における開拓集落の研究　琉球大学法文学部紀要史学・地理学編　(23) 1～2頁において田里はこれを、「琉球国由来記」（1713）、「琉球国旧記」（1731）によって確認される村落としている。仲松弥秀は、これを平民百姓村と呼んでいる。前掲2）および、仲松（1963）沖縄の集落－平民百姓村の景観的研究－　琉球大学文理学部紀要、（7）123～175頁。

18）沖縄本島地域において、1700年頃に始まる近世期以後の人口移動の所産として、士族帰農によって形成された開拓集落。前掲17）田里、171頁。

19）前掲17）田里。

20）仲松弥秀（1977）「古層の村」沖縄タイムス社。

21）前掲16）174頁。

22）この経過は、前掲11）95～101頁に詳しい。

23）前掲17）田里70〜73頁、前掲４）（1975）12頁、後述、昭和52年嘉手納町・沖縄市・北谷村軍用地等地主会資料を検討し聴き取りにより補足。

24）前掲16）２頁。

25）前掲５）23頁、28頁。

26）前掲６）17頁、21頁、28頁。

27）北谷町役場（1981）「北谷町勢要覧」。

28）前掲13）沖縄市（1975）資料編９頁。